皇太后宮位牌

一薬師如来　壱躰
一諸経巻物　百五十巻
一白山宮牛玉　板木壱枚
一楊枝縁起　同壱枚
一彼岸講掛物　壱軸
一檀廻り仏具　数弐十弐之内
れい弐ツ
一妙法蓮花経　八巻
一法花仙報　弐巻
一阿弥陀経　壱巻
一大乗妙典　弐巻
一不動尊保　壱巻
カねノ
一花立　壱ツ
同
一蝋燭たて　壱ツ
一仏器　壱ツ
一黄金仏　五躰
是ハ文殊菩薩御厨子台之内ニ納有之候
一両界縵羅　箱入
一紺紙金泥法花経　八巻
一阿弥陀仏　一躰
一仏　三躰

一弘法大師　壱躰
一同　石仏　壱躰
一糸花鬘　壱ツ
一戸帳　壱ツ
一金花鬘　壱ツ
一経机　四ツ
一前机　壱ツ
一前鏡　弐枚
一香はん　壱組
一燈明台　壱組
一檀机　壱ツ
一礼盤　壱ツ

古川徳兵衛寄附

一金灯篭　一対

宇治菱木宗見寄附

一金灯篭　壱ツ

福泉坊之内什物

本尊
一阿弥陀仏　壱躰
一脇仏　弐躰
一舎利　厨子入三ツ
一不動尊　厨子入壱躰
一庚申　厨子入壱躰

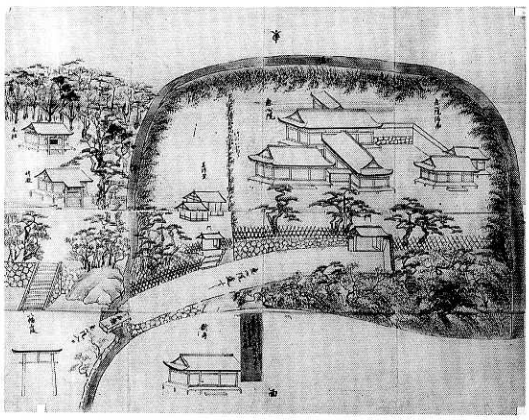
一略縁起　板木壱枚
一牛玉道具　一式
一御札箱　三ツ
一インキン　壱ツ
一シヤハリ　壱ツ
一カね花立　壱ツ
一香炉　三ツ
一懸ケ輪燈　壱ツ
一般若板木　壱枚
一白山宮御影板木　壱枚
一金仏器　数六ツ
一白山御膳箱　壱ツ
一神酒徳利　大小弐組
一けい箱入　壱ツ
右之通相改御預ケ申候、以上
文政八酉十二月　庄屋　市左衛門
年寄　徳兵衛
惣代　新次郎
福泉坊御留守居
印成殿

〔40〕恵心院文書114
由緒除地朱印取調書
一山城之国宇治郡宇治郷恵心院義者、開基弘法大師、中興恵心僧都説法之地ニ而、其後中絶之処慶長年中真言宗沙門良泉ト申僧再興仕、従夫代々弟子譲り御座候
一恵心僧都之詞ニ而、伏見院様御宸翰壱軸、当院什物ニ而守護仕候
一禁裏様御祈祷所ニ而長日御祈祷護摩修行仕、毎初春御札巻数献上仕来申候
一菊御紋之義ハ往古より付来り候、拝領仕候年月等相知不申候
一葵紋之義者元禄四卯年天英院一位様寄附被成候付、本尊厨子并戸張等ニ相付申候
一当院境内東西八十間南北六十間坪数四千八百坪御座候、右者往古より御除地ニ御座候、拝領仕候年月相知不申候
一久世郡白川村蔵之坊朱印地面高三十石、山城国久世郡小倉村ニ而院納仕候
一豊臣秀吉天正十三年十一月朱印高三拾石小倉村ニ而院納仕候
一徳川家康公元和元年七月朱印高三拾石院納仕候、夫より代々去ル徳川家茂公迄頂戴仕候
右者久世郡白川村蔵之坊朱印慶長中より恵心院永々兼帯仕候、右之外元幕府由緒等之儀者無御座候
慶応四辰年閏四月　閏四月十九日東役所
月番膳所　役人本多文三郎江相渡シ申候
美濃紙壱冊半紙壱冊袋入両方共一所ニ納候
山城国宇治郡宇治郷　無本寺真言宗恵心院

恵心院の建造物

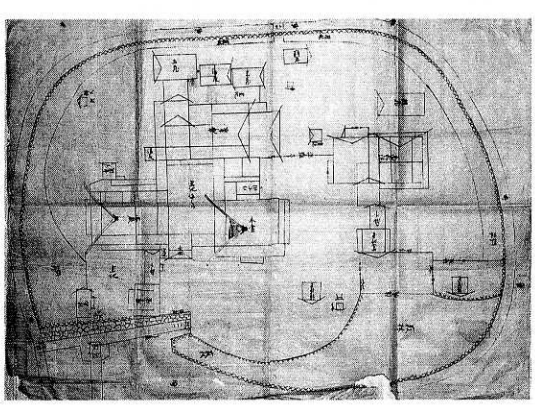
一、境内の変遷

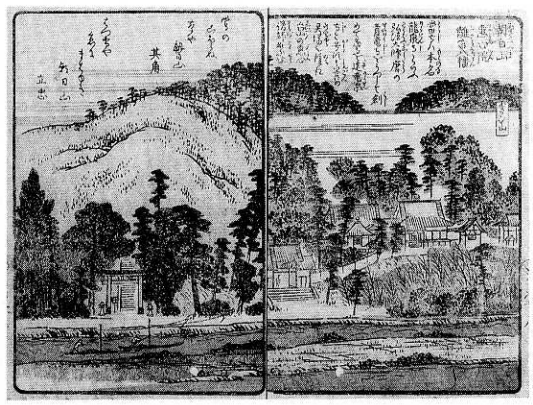
恵心院は宇治川右岸の丘陵にあり、朝日山山頂と平等院鳳凰堂とを結ぶ軸線のほぼ中間に位置する。恵心院には近世の境内の状況を示す絵図がいくつか伝わっており、次の絵図はそのうちの一つである。承応元年（一六五二）の年紀を記した付箋が張られているので、以下では本図を「承応絵図」（恵心院文書135）とする。



ここに描かれている建物は現在の建物とは異なる。後述するが、延宝四年（一六七六）に現在の本堂が建てられているので、「承応絵図」に記載されている伽藍は前身の建物と考えられる。

次に、幕末に刊行された『宇治川両岸一覧』に載る景観と同じ建物配置を記した絵図（恵心院文書129以下「恵心院境内図」）を挙げる。これによると近世後期の境内の状況が詳細にわかる。





本堂の北側には玄関を挟んで客殿があり、東側には内玄関を挟んで庫裏が続く。庫裏の奥には土蔵・湯殿・米蔵が並ぶ。客殿の西には廊下を挟んで宝形造の聖天堂がある。本堂の南側には隠居所の南松院・薬師堂・鐘楼・羅漢堂などの建物を配置しており、それらの西側には小さな祠が確認できる。聖天堂の西には中門（現存の門）があり、そこから北側に下った所には表門があったことがわかる。

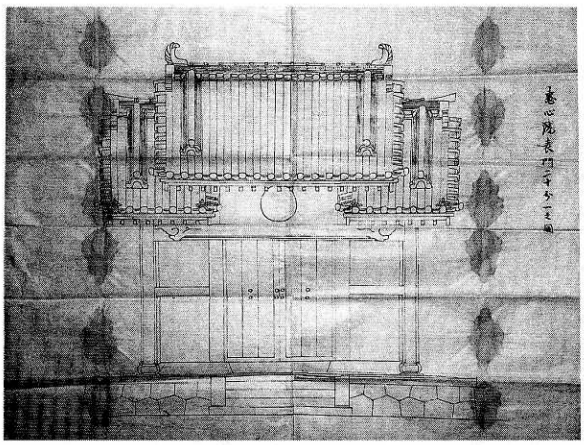
「恵心院境内図」では、敷地の周囲には藪林が、そして西側を除く周囲には堀が描かれている。付近の岩盤から湧いてくる水の排水のために必要だったと考えられ、堀は明治四十一年（一九〇八）頃までは存在していた。

二、本堂周辺の建物

表門

『宇治川両岸一覧』や「恵心院表門二十分一之図」（恵心院文書163・左図）から判断すると、一重・切妻造段違・本瓦葺で棟に鴟尾（しび）がのり、太鼓張型礎石を用いている。

萬福寺の総門やいくつかの萬福寺塔頭の表門と同じく、明・清時代の中国建築に由来する黄檗様式の門であった。従ってこの表門も後述する本堂と同じく萬福寺大工秋篠家の手によるものと考えられる。和様を基調とした境内建物群のなかで、黄檗様式を前面に出した建物は表門だけであり、異質な感じをうける。表門は、明治三年（一八七〇）に大破を理由に取り壊された。



中門

現存する門は小規模な薬医門である。瓦に天正十七年（一五八九）の銘があったが、平成四年（一九九二）に解体修理され、柱以外は新材と取り替えられた。「承応絵図」によると、現在門のある位置に向きは異なるが、現在の門と同規模の門が描かれている。天正期に建てられた門が、向きを変えて現在に至っていると考えられる。

庫裏

「恵心院境内図」などに記載されている近世後期の庫裏は明治三年（一八七〇）に取り壊された。以後、明治七年、明治四十三年、平成八年に庫裏が新築されている。

聖天堂

前掲文書〔28〕によると、元禄四年（一六九一）に徳川家宣正室の天英院が聖天堂を寄進したとある。聖天堂は本堂の南西にあり、規模は桁行二間・梁行二間であった。内部は背面側の半間幅に須弥壇を設けており、歓喜天を祀ってあった。しかし大正七年（一九一八）頃には、「本堂の側に聖天堂あれども、既に大破せり」（『旧都巡遊記稿』）という状態であった。その後しばらくして取り壊されたようである。

南松院・薬師堂

「承応絵図」には「恵心院隠居南松院」と「薬師の寺」「薬師堂」が確認できる。これらは『山城名勝志』や「恵心院境内図」に記載される「南松院」「薬師堂」に通じるものと考えられる。

鎮守社

鎮守社は一間社春日造で、本堂の北西にある。祭神は白龍大神である。彫刻の様式から判断すると、近世後期以降の建築と考えられる。

三、本堂

沿革

本堂には、次の棟札が遺される。表に「奉再興城州宇治恵心院本堂一宇伽藍安穏仏法興隆院内安全□□所□収延宝三丙辰歳三月吉祥日恵

心院当住法印良攸同弟子二位良重」とあり、建築年代が延宝四年（一六七六）と判明する。また裏面の記載から、宇治代官の上林峯順重胤をはじめ上林竹庵、味卜、平入、春松、三入など上林一門が造営に携わったことと、大工が秋篠兵庫藤原吉兼であったことがわかる。

この秋篠兵庫は、寛文年間（一六六一～七三）に、萬福寺の伽藍を中国風の黄檗様式で造営している。ちなみに恵心院本堂で黄檗様式が使われているのは、正面に張り出している向拝（ごはい）柱の下の礎石が太鼓張型をしている点のみである。なお秋篠家は五ヶ庄広芝に居住し、代々萬福寺大工を世襲した。

屋根瓦には、延宝五年の銘のある鬼瓦があり、瓦は宇治の山田源左衛門烝によって作られたことがわかる。その後、側面の仏壇や背面の下屋などが増築された。明治三年と昭和五十六年には屋根修理が行われている。

特徴

建物は、桁行四間・梁行四間で、入母屋造・本瓦葺の屋根をのせる（背面屋根の桟瓦は後の改修による）。須弥壇がある室の正面外側には間口一間の向拝を配している。須弥壇には背後に二本の来迎柱があり、両柱をつなぐ梁の上側には来迎壁が残っている。梁の下側は、現在は開いているが、痕跡から当初は壁があったことがわかる。この須弥壇室の背後に仏壇が三つ並ぶ。この内、両端の仏壇は当初のものであり、かつては引違戸があった。

一方、中央の仏壇は後補で、もともとは背後へ貫通していた。「恵心院境内図」によると、かつては本堂とその東側にあった内玄関や庫裏をつなぐ通路として使われていたようで、内玄関と庫裏がなくなった後、通路はふさがれ仏壇に改造された。この改造は明治末期から大正前期の間になされたようである。来迎壁が取り外されたのも同じ時期と考えられる。

須弥壇室の南側には、かつて護摩壇があった室が接続する。護摩壇室には、天井中央に護摩で焚いた煙を逃がす換気孔があり、また室内に護摩を焚いた痕跡が認められる。須弥壇室と護摩壇室との間仕切り部分には改造の痕跡が認められないので、本堂の非対称の平面形態は当初からのものと考えられる。

天井は、須弥壇室は格（ごう）天井、護摩壇室は竿縁（さおぶち）天井である。両室は襖で仕切られる。襖上は筬欄間（おさらんま）となっている。両室の背後には増築された位牌安置室と物置室が付属している。

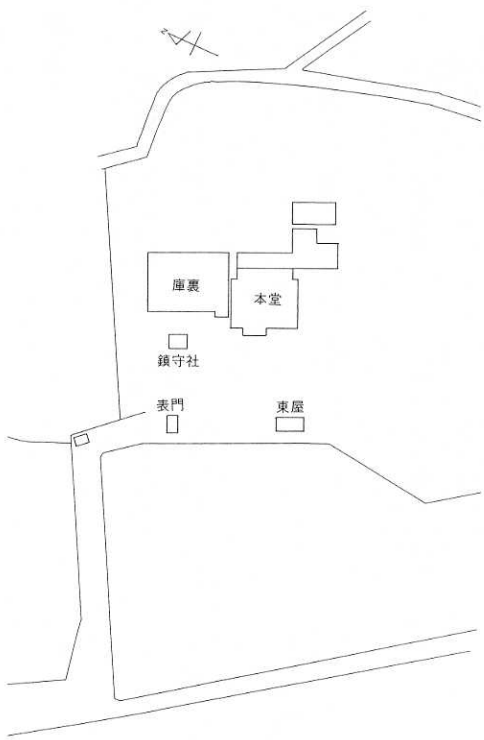
四、おわりに

恵心院本堂は、萬福寺の造営に携わった秋篠兵庫によって延宝四年（一六七六）に建てられた和様仏堂である。改造部分が多いものの、造営当初の部分の質は良い。建物は、中央の須弥壇室の南側に護摩壇室を付属させた左右非対称の平面をもつ。この形態は特異であるが、当初からのものと考えられる。将軍家や宇治茶師が祈祷を依頼していたという寺伝や文書が示すとおり、護摩による祈祷と一般の法事を分けて行うほどに祈祷が重視されていたことがわかる。

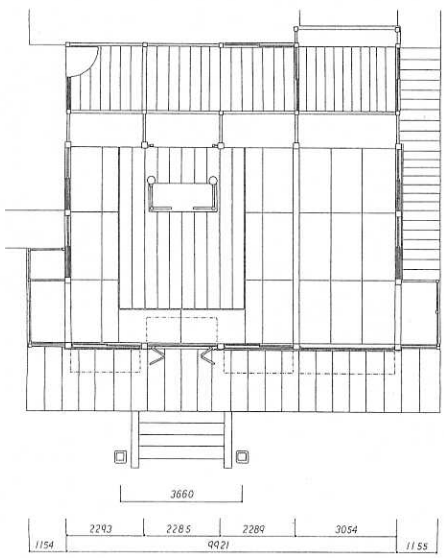
本堂の形態は、境内の伽藍配置の変遷に従って変化しており、その状況が比較的詳しく追跡できる。なかでも特徴的なのは、近世には須弥壇室の背面中央が玄関・庫裏への通路であったものが、近代に玄関が取り壊されると通路をふさいで仏壇に改変されたことである。その後も本堂はいくつかの改造がなされている。こうした改造から本堂の使用方法などについて、時代的な特色がうかがえて興味深い。

現状写真

現状配置図



現状平面図



江戸時代の地誌・紀行に見る白川と恵心院

江戸時代以降の地誌ならびに紀行におさめられた、白川と恵心院に関する記事を紹介する。大きく白川と恵心院関係に分け、それぞれを年代順に配した。地誌は、白川、恵心院ともに記事が見られるが、紀行については今のところ後者のみである。白川も、宇治からさほどの距離とは思えないが、やはり宇治川畔の景勝地に位置する恵心院とは違い、訪れる人は少なかったようだ。その恵心院にしても、多くは訪れた寺社を羅列するうちの一つに数えられるにすぎない。そのため、関係記事の見える紀行を付表にまとめた上、比較的詳しい記事を載せるもののみ本文を該当年に掲げた。

各資料は、番号、資料名、刊行あるいは著述年、出典番号、本文の順に掲げ、出典の詳細については末尾にまとめた。本文は、関係記事のみ抽出したため、実際の掲載状況と異なる場合がある。〈〉内は、原文では割り注。

さて、史料本文では割愛したが、地誌類の宇治関係部分には、恵心院以外のところでも恵心僧都源信に触れる記事が散見される。最初の京都案内書である『京童』（明暦四・一六五八年刊）で、平等院をその説法の地とするのをはじめ、鳳凰堂周囲のいわゆる「阿字池」を彼の作とするもの（『山州名跡志』ほか）も多い。浄土信仰が盛んであった平安時代、浄土教を大成した源信の影響は大きく、宇治に別業を営んだ藤原道長もその著書『往生要集』を学んだ。厳密に言えば、彼がこの地を訪れたとの記録はなく、頼通が平等院を建立したのも死後三十年以上たってからのことであるが、後世の人々からすれば一時代のことである。浄土教文化の集大成ともいうべき平等院と関連づけて考えるのも無理はない。

もうひとつ、宇治と源信の接点が源氏物語宇治十帖である。薫と匂宮、ふたりの男性との関係に悩み宇治川に身を投げた浮舟は、比叡山は横川の僧都に助けられ尼となるが、この僧都のモデルこそ源信であった。平等院と源氏物語、この両者が宇治と源信を結びつけ、彼の異名・恵心の名を持つ寺院をこの地に誕生させたといっても良いだろう。以後源信説法の地は恵心院に移り、後には、ここに住んだ、あるいはこの寺を中興したと、その関係はより深く説かれるようになる。

■白川関係

一　日次紀事　延宝四年（一六七六）著　出典1

●凡春三月有桜花処、（中略）南方則（中略）宇治平等院・同興正寺（興聖寺）・同白川　金玉山（後略）

（九月十八日）

△宇治白川白山権現祭　此社在金色院之後山

二　菟芸泥赴　貞享元年（一六八四）著　出典2

（第四上）

一宇治の西南十二三町ばかり山中に白河といふ所有、谷河ながれたる

砂の色まことに白し、両方に家居有、河上に白山権現を祝る社有、古所にみゆ

三　雍州府志　貞享三年（一六八六）刊　出典3

（一　山川門）

△白川　在平等院西南、相去一里許、山水幽邃之地而誠可謂小桃源、自古宇治土人避乱隠妻子之処也、到此処有坂、一夫遮路則輒不能入之、今民家在所々、多製茶

（五　寺院門下）

○金色院　在白川、本尊観音也、楼門有額、然文字不分明、諸堂亦零落、有鐘、建武年中之所置也、元為天台宗、開基不知為何僧也、残僧今多携妻子、専製茶売之、宇治茶家尾崎坊等此寺僧之為茶人者也、連歌師宗長記、自薪里赴京師時、宿此寺之辻坊、而修連歌之会云々、辻坊今不知在何処矣

四　京羽二重織留　元禄二年（一六八九）刊　出典4

（巻之三　事跡）

○辻之坊跡　連歌師宗長記に云、薪のさとより京師におもむくとき、宇治の近隣白川金色院の内辻の房に宿して連歌の会をつとむと、今辻の坊いづれのところかさだかならず

（巻之四　淵河）

○白川　宇治平等院の西南相去る事一里ばかりにあり、山水幽邃の所にして誠に小桃源とも可謂、いにしへより宇治の土人乱をさけて妻子をかくすの所也

五　山城名勝志　正徳元年（一七一一）刊　出典5

（巻第十八）

○白川　〈平等院東南半里許有一村、号白川村、有白山権現社、九月十八日祭之〉

兵範記云、仁平三年四月十五日、去八日離宮御輿迎以後平等院三綱所司以下品々下部殿中上下宇治侍、宿直雑主殿皆可供奉、田楽為本散楽可為先風流、殊被仰下云云、其外宇治白川等庄々法師原各々賜装束、彼八日可致供奉云云

宇治山の奥白河といふ所にて　　兼載

園塵集

谷ふかみ影や夏の夜秋の月

○金色院　〈在白川村、本尊観音〉

〈或云、楼門額文字不分明、諸堂亦零落、有鐘、建武年中所置也、元天台宗〉

〈土人云、有文殊堂・不動堂・虚空蔵堂・経堂・弥勒堂・薬師堂・鐘楼、金色院別所十六坊云云〉

○辻坊

宗長日記云、大永六年八月十一日に、〈従薪里〉出京、宇治白河別所辻坊一宿

六　山州名跡志　正徳元年（一七一一）刊　出典6

（巻之十五）

白河〈所名〉　在平等院西門南十八町、有民家、名村、中ニ白沙ノ河

アリ、凡当国ニ号白河両所ニアリ、此所都ノ巽ニシテ号南白河、一所ハ北白河是ナリ

○金色院　在同所東山下、門〈西向〉、額〈竪額、文字消損〉、伝云、弘法大師筆跡ト、寛永年中宇治ノ住人此額ヲ奪テ其亭ニ掲ニ、忽一家病悩ス、仍再返掲ルナリ、堂〈南向〉、本尊文殊菩薩、秘仏、作不詳、古今霊応新ナリ

○白山権現社　在仏殿南山上、拝殿〈西向〉、社〈同〉、所祭白山権現、例祭九月十八日

○六所権現社　在堂傍山上、当所地主神也、六所神号不詳

○十三重石塔婆　在堂東山、此塔当寺本願皇后塔云云、当院開基昭澄上人、伝云越泰澄高弟也、是故ニ専ラ白山神ヲ尊崇シ、仍テ以所勧請云云

○本願檀那　四条后云云、案号四条后、清和天皇后ニシテ貞数親王母也、此人歟

伝云、伝教大師正観音一千体ヲ刻テ当院ニ安置セリ、乱世ニ至テ所々ニ散在ス、今所存什物両界ノ曼陀羅ヲ、長一尺三四寸、横一尺許ノ檜ノ板ニ刻現ス、又同筆紺紙金泥ノ法華経一部アリ、古ニハ僧房多シ、中比ヨリ衰微ニ至リ、僧侶妻子ヲ帯シ製茶為業也、雖然此地白山ノ神地ノ故ニ於地安産スルコト不叶

七　五畿内志　享保十二年（一七二七）著　出典7

（山城之八　久世郡　山川の項）

鍋倉山　〈在白川村上方〉

白川渓　〈源自東籠山歴白川村入宇治川、兵範記所謂宇治白川即此、猪苗代兼載園塵連歌集云、宇治奥白河止云所仁弖谷深影矢夏夜秋月〉

（同　土産の項）

酥柿　〈産白川村者少仁〉

（同　神廟の項）

室城神社　〈在所未詳、或曰白川村白山神祠、即此境内有神宮寺、号金色院、文殊堂一宇、有鐘、勒曰、建武二年二月鋳、土人云、有不動堂・虚空蔵堂・経堂・弥勒堂・薬師堂・別所十六僧坊、而今皆廃、又村内有藤頼通公別業故趾、康平三年十一月設法会、賀円満院明尊座主九卜之算于此、見元亨釈書〉

八　山城名跡巡行志　宝暦四年（一七五四）著　出典8

（第六）

白河〈村名〉　在平等院南門南十八町〈白河当国在二所、云之南白河〉

○金色院　在当村東山麓、門〈南向〉、額〈弘法筆〉、堂〈南向〉、本尊文殊菩薩〈作不知〉

○白山権現社　在仏殿南山上、社〈西向〉、延喜式謂室城神社、是歟、当院即当社ノ神宮寺也

○六所権現社〈在堂傍山上〉　当所地主神也

○十三重石塔〈在堂東山上〉　当寺本願四条皇后塔也〈清和帝后也〉、当寺開基昭澄上人〈越州泰澄法師高弟也〉、相伝伝教大師刻聖観音一千体、安置当院、兵乱時散在、什物桧板刻付両会曼荼羅紺紙金泥法花経一部〈伝教筆〉、古有諸堂数宇、今僧坊為在家制茶為家業

九　**都名所図会**　安永九年（一七八〇）刊　出典9
（巻五）
金色院白山権現　は白川村にあり〈平等院より十八町南なり〉、開基は昭澄上人、此里の産沙神とす、祭は九月十八日なり

一〇　**都名所図会拾遺**　天明七年（一七八七）刊　出典10
（巻四に「宇治白川白山大権現　金色院」の挿し絵あり）

一一　**花洛羽津根**　文久三年（一八六三）刊　出典11
（五）
金色院　〈右同所（平等院）西門の南、白川といふ処にあり〉
宗旨天台、本尊文殊菩薩、秘仏、作詳ならず、されと古今霊元あらたなりといふ、開基照証上人、今は零落して何宗の僧の住するやしらす
（八）
鍋倉山　久世郡白川村の上方にあり

一二　**京華要誌**　明治二八年（一八九五）刊　出典12
宇治白川〈久世郡宇治町大字白川〉
平等院の東南凡二十町にあり、南方より流れて宇治川に入る、水底すへて白砂にして宛然布を曳くか如し、白川の名はこれより起る、山城に白河二あり、此川は京の巽にあるを以て白南河（ママ）と云ひ、愛宕郡にあるを北白河といふ

一三　**宇治名勝案内記**　明治三二年（一八九九）刊　出典13
〇白山神社　平等院より川に沿て上る七八丁白川浜に到る、右に折れ渓流に沿て山間に入る、此川は宇治の白川とて古歌多し、白川村は戸数五十二あり、村の左側に朱塗大門あり、永承三年の建築にて古雅を極む、学は道風の筆といふ、古は門内に坊舎ありしも、今は廃絶し農家二三戸あり、右に折れて広前に桜楓多し、石階数十級を登れば喬木鬱蒼たる山腹に拝殿（久安二年建造）、拝所本殿は檜皮屋根白木三科作りなり、当社は建治三年四月金色院の昭澄上人越の白山宮を勧請せしもの、裏阪に喬杉多く、文殊堂・不動堂ありしも、明治六年他に移す、幽邃閑雅の勝地なり
〇地蔵院　白山宮の元坊官にて金色院外十五坊ありしが、皆廃滅して本院のみ存す、明治六年神仏分離の命にて不動堂と共に今の地に移せり、本尊は黄金仏（黄銅）釈迦其他虚空蔵菩薩、蓮花乗の三尊仏（弥陀観音二仏鑑査状）、紺紙金泥法華経、唐画金胎両部曼陀羅等を什宝とす

一四　**旧都巡遊記稿**　大正七年（一九一八）刊　出典14
白山神社
平等院を東南に距る十八町許白川村にあり、大門は朱塗にして道の左側に立つ、永承三年の建設にして今より八百五十五年前のものなり、掲ぐる所の額は小野道風の筆なりと云、本社は其東南の石塔を上りたる高処にありて西面し、前に拝殿あり、外椽の左右に頗る古雅なる獅子一対を置く、祭神は加州白山宮にして昭澄上人の勧請なり、当社は久安二年の建営に成り、今を距る七百五十余年前のものたり、傍に天照皇太神宮・春日大神・恵比須・天満宮・八幡宮等を祀れる一宇あり、